

渡部昇一「少年日本史」を読んで

2017年8月渡部昇一さんの「少年日本史」を読んだ。この本は今までに読んだ歴史書と違って、心に響くものがあつたので、その感想を記すこととしました。第一刷が発行されたのは2017年4月25日ですが、渡部さんは2017年4月17日に他界しています。本の後書きに、渡部昇一という人間が、これからの日本を支える若い人たちに向けて書いた一種の遺言とみなしていただいて結構だを書いてあります。私は、今、70歳半ばですが、私のような高齢者でも、渡部さんの強いメッセージが伝わって来ます。



この本を読んで直ぐに、私たちの学んだ歴史は戦後マルクス主義の唯物主義者によって書かれた歴史教科書であつたことが判りました。すなわち私たちが学んだ歴史は遺跡に重点が置かれ、記紀(古事記と日本書紀)は、無視されてきました。記紀は特に天皇の歴史であることから、無視されてきたばかりでなく、これに替る文献(魏志倭人伝)が使われてきたようです。

この本の最初に、渡部さんは歴史とはなんだろうと問いかけています。これに対してイギリスのバーフィールドの説を用いて、歴史を虹としてこの本を書いたと書いてあります。すなわち雨が降った後の空には無数の細かい水滴が残っていますが、これらの水滴の一つ一つが歴史的史実であり、この水滴のある角度、ある距離をとって眺めると、虹が見えます。美しい虹を見るためには正しい歴史観を持つてみるのが大事であると言っています。

渡部さんは神話の時代から現代まで一貫して、日本という国が素晴らしい國であつたことを、「文献」と「遺跡」の両方から噛み砕くように説明しています。

私が受けた戦後の教育とは違う正しい歴史として、この本が教育現場の副読本として採

用されることを期待したい。

さて日本史の虹の中で私自身が知らなかった歴史的事実について何点か記してみたい。

(1)東(あずま)

東西南北の呼び方で東のみ、ひがし、とう、あずまという 3 つの呼び方がありますが、これが記紀神話から来ていることは知りませんでした。記紀によると、日本武尊が東国を平定して帰る途中三浦半島から房総半島に渡るときに突然の暴風に遭遇し、船が転覆しそうになりました。この時、妃であった弟橘媛は、海神の怒りを鎮めようと自らの身を海に投げた結果暴風はやんで日本武尊は無事に房総半島まで到着できたのですが、弟橘媛は亡くなってしまいました。碓氷峠まできて弟橘媛の事を思い出した日本武尊は、弟橘媛が亡くなった東のほうを向いて「吾妻はや・あずまはや」（ああ私の妻はもう死んでしまったのだなあ）と言って嘆いたことから東を「あずま」と呼ぶようになったようです。

(2)八紘一字

記紀の記述によれば、歴史時代の始まりの天皇は神武天皇で、神武天皇が橿原宮で即位式を行った時に、次のような国家の基本方針を表明しました。すなわち、「兼六合以開都 掩八紘而為宇 不而可」（天地四方をまとめて都を開き、世界の隅々までを一つの家とするのはまたよいことではないか）。これが後に(1903)仏教運動家(田中智学)によって「八紘一字」という言葉でまとめられる(造語)ようになったようです。

この言葉の通り、神武天皇は異なる民族や部族を討伐して滅ぼすことなく、皇室の神とともに、各部族が尊敬する神も容認し、皆が仲良く暮らせる政治を行いました。

この精神は昭和になってから役立ちました。ドイツと日本が手を結んだ時に、ドイツのユダヤ人迫害の協力要請を、神武天皇の「八紘一字」に反するといって反対しました。さらにポーランドのユダヤ人が迫害から逃れようとしたときに、米英はともに上陸を断っています。日本はビザ支給を行って難民の受け入れに力をつくしたようです。

戦前には日本軍のアジア侵攻の基本国策要項にこの言葉が使われました。紀元 2600 年記念切手には「八紘一字」の文字が入っています。同じく紀元 2600 年を記念して宮崎市の平和公園に建設された「平和の塔」にも「八紘一字」の文字が入っています。これらのことから、この言葉は戦後 GHQ により使用禁止となったようです。使用禁止となったことは少年日本史には記述がありません。

つい最近でも国会で「八紘一字」という言葉が話題になっていました。

いづれにしても、日本の歴史時代の始まりである神武天皇の言葉が今も生きている国は世界を見てもない事であり、我々は日本の歴史に誇りを持ちたいと思います。

(3)七生報国

この語は後醍醐天皇に仕えていた楠正成が摂津国湊川の戦いで足利尊氏の軍に敗れて敗死するとき、正成は弟の正季(まさすえ)に「なにか言い残すことがあるか」と尋ねました。正季は「七たび生まれて朝敵を滅ぼさん」と言い、これに答えて正成も「いつかこの本懐を達せん」と言って刺し違えて亡くなったそうです。この時の会話はその後「七生報国」(何度でも生まれ変わって国(天皇)のために尽くす)という言葉になったようです。

この言葉はその後の日本人の心に永く根付いていきます。明治維新の原動力となった西郷隆盛、吉田松陰ばかりでなく外国人もこの精神を活用しています。第二次大戦のときも特攻隊員が「七生報国」と書かれた鉢巻をして飛び立っていきました。226 事件の決起趣意書(昭和維新と彼らはいっていた)の精神も「七生報国」そのものです。三島由紀夫が市ヶ谷の陸上自衛隊駐屯地で割腹して訴えたことも同じです。

このように楠正成の精神は日本人の心に生き続けています。このように強い精神であるために GHQ はこの精神を骨抜きにしようとしていました。これにより大きな打撃を受け続けていますが、「七生報国」の精神は生き続けています。皇居前の楠正成像がいまも睨みを利かせています。



皇居前の楠正成像は御札の挿絵として用いられた

(4)「イノシシー一枚あれば足りるだろう」

和氣清麻呂

奈良時代の後半に皇室の存亡にかかわる宇佐八幡宮信託事件がありました。この事件は称徳天皇が病気になった時に祈禱を行って病を癒したことから天皇の信頼を得て太政大臣、法王まで上り詰めた道鏡という僧が称徳天皇の後継者になることを画策します。このとき宇佐の神官が「道鏡を天皇にすれば天下が太平になる」という宇佐神宮の信託があったことを奏上します。天皇はこの信託の真偽を確かめるために和氣清麻呂を宇佐八幡宮に派遣します。清麻呂はここで聞いた信託(道鏡を排除すべしという正反対の信託)を天皇に奏上しました。それを聞いた称徳天皇は怒りました。寵愛する道鏡を排除せよというのが気に入らなかったと思われます。清麻呂を左遷したうえで、九州の大隅国に流しました。遠方の九州まで流すことは暗にその途中で殺すことを意味します。ところが、殺されそうになっ

た時にイノシシが 300 匹出てきて助けてくれたため、無事に大隅までたどり着けたといわれています。

後に称徳天皇が崩御すると、その時に藤原百川という才能ある人物が現れており、道鏡は下野国に流され、清麻呂は都に戻され、復位を果たします。

この日本の歴史を変えかねない重要な事件を救ったのは和気清麻呂であり、歴史上の重要人物ということで戦前的高額紙幣である十円札の肖像に和気清麻呂が印刷されました。紙幣の裏にはイノシシが描かれていて、この紙幣はイノシシと呼んでいたようです。



少年日本史を読んで、あまり良く知らなかった 2~3 の事柄について書きましたが、良くチェックすると、これらはすべて天皇に関する史実であり、戦後の唯物史観の歴史教科書から排除されていたのではないかと思います。歴史ドラマなどに登場するいわゆるヒーローは美しく創られたものであることは理解していましたが、かなり古い時代の歴史も例外ではないことが判りました。

今回ここに取り上げた、神武天皇、楠正成、和気清麻呂などのヒーローも信長、秀吉、家康、竜馬などに劣らず後世の人が作り上げた人物像であることも判りました(Web による調査)。歴史とはそういうものらしい。

今回少年日本史を通読してもう一つ感じたことは、古代から現代に至るまで歴史の表舞台では、戦いの連続であり、今でも同じように続いているということです。これらの戦いで勝つためには、効果的な戦力(情報力を含む)をもつこと、英知を働かせ正しい選択をすることが大事であると思います。

このような観点から、現在の北朝鮮問題、中国やロシアの拡大戦略(東シナ海、北方領土問題他)、テロや難民問題、人種問題などは現在のアメリカでも大問題となっていることを考えると、人類は余り進歩していないようにも思います。やはり、歴史は繰り返すのでしょうか。

2017 年 9 月 廣瀬博